

氏名(本籍)	ひび あまの ち さ 日比(天野)知幸(愛知県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第2746号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	三島由紀夫初期戯曲研究 —そのドラマトゥルギーと戦後演劇における位置—
主査	筑波大学教授 池内輝雄
副査	筑波大学教授 上田浩二
副査	筑波大学教授 稲垣泰一
副査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学助教授 新保邦寛

論文の内容の要旨

本論文は、昭和期日本文学の代表作家である三島由紀夫の初期戯曲（以下「三島戯曲」と略記）をとりあげ、作品分析を行うとともに、それらが発表された同時代の社会・文化、とくに文学・演劇界とのかかわりを精査し、三島戯曲の戦後演劇史における正当な位置づけを提起するものである。

本論の構成は次のとおりである。

序章

- 第一章 劇作家三島由紀夫の出発—「あやめ」から「火宅」へ
- 第二章 「火宅」と戦後演劇
- 第三章 文学／演劇の対立とリアリズム論争
- 第四章 「ニオベ」論—フランス現代演劇ブームとの距離をめぐって
- 第五章 「メーディア」から「獅子」, 「ニオベ」へ
- 第六章 「雲の会」の結成—リアリズム論争の進展
- 第七章 「邯鄲」と詩劇の探求—『近代能楽集』へ

結章

序章では、本論文の目的、および研究の方法を掲げる。すなわち、昭和20年代を演劇の不毛な時期とするのが文学史の常識（奥野健男：戦後演劇の「10年間は空白だった」）であるが、本論はそうした常識に逆らい、新しい演劇運動の気運が主として小説作家の間に生起していたこと、三島戯曲「火宅」（昭23）・「邯鄲」（昭25）がその気運と呼応し、同時に独自の豊かな内容を持つものであることを仮説として掲げ、その実証を同時代の資料を精査することで行う方針を述べる。

第一章では、三島戯曲の第一作「あやめ」（昭23）の作品分析を行い、従来断片的に指摘されているこの作品の原典に関する先行論は誤っており、『源氏物語』や浄瑠璃を取り込みつつ、『源平盛衰記』の名誉譚を恋愛譚に組み立て直している点を指摘し、三島の古典受容の仕方、および後年の『近代能楽集』（昭31）につながる創作意

図・方法などの原型を示す作品としてとらえる。

第二章では、古典世界を描いた「あやめ」から現代の家庭生活を描いた「火宅」へと主題・題材が変化した過程を考察し、その背景に当時の演劇界の不振があり、打開策として新しい〈現代劇〉の創造が求められていた事実を踏まえ、「火宅」がそうした要望に応えた戯曲であることを実証する。また、この戯曲が新秩序を体現しようとする知識人・夫とそれに抵抗する妻との葛藤を軸に、一見平和に見える戦後の家庭に潜む鬱屈した〈感情〉を描き出したことを評価し、こうした見えないものをリアルに表出する三島独特なリアリズムによる作品であることを指摘する。

第三章では、「火宅」と、三島が想を得たと考えられる岸田国士の心理劇「紙風船」(大14)との比較考察を行い、三島戯曲が西洋の近代心理劇の系譜を引きながら、同時に戦後の新しい問題を提起していることを実証する。また、同時代の新聞・雑誌記事を博捜し、この作品が新世代の小説作家・批評家に好評であった反面、上記リアリズムの新しさが演出家・俳優に理解されず、作家と演劇人との間で演劇のリアリズムをめぐる論争が起こったことを明らかにする。

第四章では、ギリシア古典劇に取材した「ニオベ」(昭24)を取り上げ、これが当時、加藤道夫の〈自然主義的リアリズム〉批判やジロウドゥ紹介と軌を一にすることに注目して作品分析を行い、「ニオベ」がギリシア劇「アンティゴネ」とも、またその継承を図るフランス現代劇(アヌイ「アンティゴネ」)とも一線を画す独自の作風を持つことを指摘する。

第五章では、同時代の新しい演劇の一つの方向が喜劇に向いていたことを明らかにし、それと対抗するかたちで三島が悲劇「獅子」(昭23)書いたことを、作品分析により検証する。

第六章では、「雲の会」成立の経緯と会の傾向とを資料の博捜をもって考察する。この会は岸田国士が小説作家・批評家と演出家・俳優との対立を解消すべく、福田恆存と三島を中心メンバーに選び、多くの関係者を結集させて作ったものである。従来、「雲の会」に関する研究は皆無に近い(みなもと／ごろう氏の論考など一、二)が、本論では、会の結成の契機に三島の「火宅」をめぐる論争が介在したことを実証し、その活動の実態を解明する。また、そこでの三島の活動が彼のその後の戯曲創作の原動力としてはたらいしたことを明らかにする。

第七章では、「雲の会」の掲げた課題と『近代能楽集』の第一作「邯鄲」との関係について考察する。「雲の会」での再重要課題が台詞をめぐる問題であり、その理念が詩と劇との融合した能、歌舞伎、フランス演劇に基づくことを、雑誌『演劇』などの分析を通じて明らかにし、「邯鄲」がそれらの実験作であったことを指摘する。とくに、『演劇』誌上での加藤道夫の発言と三島の発言との共通性、加藤の主張する台詞の機能と三島の『近代能楽集』の台詞の実態との類似性などを明らかにし、三島が「雲の会」で先導的な役割を果たしたことをとたえる。結論として「邯鄲」を含む『近代能楽集』が「雲の会」の演劇運動の一つの成果、帰結点であったことを述べる。

終章では、以上の考察を踏まえ、次の様に問題点を明らかにする。

- (1) 三島が同時代の演劇運動の動向と緊密にかかわりながら創作を行ったことが明らかになった。こうした事実を踏まえ、戦後演劇史における三島および三島の初期戯曲を再評価すべきである。
- (2) 三島戯曲の背景には、戦後の演劇界でおこったリアリズム論争がある。当時のリアリズム論には、社会主義的リアリズム、自然主義的リアリズムなど一律に判別できない多様な概念が含まれるが、三島のリアリズム論は脱社会主義的、脱自然主義的で、人間・社会の見えない内部を台詞で表す、いわば内的リアリズムとでもいうべき特徴を持っている。こうしたドラマトゥルギー(作劇法)の観点からも三島戯曲を再評価するべきである。
- (3) 三島が「邯鄲」において台詞について実験的に行った試み、すなわち台詞に掛詞、縁語、音韻、対句、比喩、引用などを配して独特なリズム感・流動感を生じさせる方法(それらは、能の詞章の影響が強いが)は、当時の新しい文学的試みとして中村真一郎らのマチネ・ポエティックや加藤道夫の戯曲と共通するところが多い。こうした新しい試みを持つ「邯鄲」を〈詩劇〉としてとらえ、戦後演劇史の上に正当な位置を与えるべきである。

(4)『近代能楽集』は、三島自身の演劇的関心、彼をとりまく戦後演劇運動の動向など、さまざまな問題・課題が集約され、集大成された作品ととらえることができる。こうした観点からの三島文学の全体像の解明、また戦後演劇史の再検討が必要である。

審査の結果の要旨

三島由紀夫は敗戦後『仮面の告白』(昭24, 河出書房), 「禁色」(『群像』昭26・1~10)などの大作・問題作をあいっいで発表し、小説作家として脚光を浴びた。その後現在までの研究・批評界において小説についての論考は多く出され、評価も高い。それにくらべ、著者の言うように、同時期に発表された初期戯曲はこれまで無視されるか、不当に低い評価が与えられてきた。著者はこうした傾向に異義を唱え、三島由紀夫文学の総合的な把握のために、初期戯曲にもって照明が与えられるべきであり、その価値も大きいことを主張する。

著者の研究方法は、作品が生み出された現場、すなわち、同時代の社会・文化、とくに文学・演劇界の動向との緊密なかかわりの中で作品の真の姿をとらえようとするものである。そのため、当時の新聞・雑誌などから、これまで埋もれていた多くの資料を掘り起こし、その精査な検証によって三島由紀夫の初期戯曲に多くの斬新な試みがなされていることを浮かび上がらせた。たとえば、「火宅」が同時代の演劇界の不振を打破するために書かれた現代劇であり、そこに内的リアリズムとも言うべき独特な方法が使われていること、また、「邯鄲」の台詞に同時代の作家・詩人らの模索した詩劇の特質・機能が見られ、しかも彼らとは異なる独自の工夫が凝らされていることなど。

さらに、これまでほとんど解明のされてこなかった演劇集団(広い意味での集団。座長を中心とした演劇結社とは異なる)「雲の会」について、その実態を究明し、そこに三島由紀夫が中心メンバーとしてかかわった事実を明らかにした。

こうした著者の周到な資料調査とそれに基づく作品分析、そこから導き出される見解は説得力豊かで、研究論文として多くの成果をあげたと評価できる。著者の唱える初期戯曲の再評価を基軸にした三島由紀夫文学世界の再構築という構想も首肯される。しかし、問題がないわけではない。

その一は、演劇史のはあくにおいて「戦後」に固執するあまり、昭和初期からはじまる近代演劇、あるいは社会主義演劇とのつながりを十分考察の対象にしなかったことである。こうした演劇の史的背景を十分に視野に収めた上で、戦後演劇、および三島由紀夫の初期戯曲を考察すべきである。

その二は、戦中・戦後の前衛詩の動向、とくに中村真一郎や加藤周一らマチネ・ポエティック・グループの押韻詩の実験との関係をもう少し綿密、具体的に比較検討すべきであったことである。三島由紀夫の台詞に関する新しい試みは中村らの詩的実験と無関係でないことは、三島由紀夫の発言、あるいは文学的な交友関係からも推測される。こうした当時の文学運動とのかかわりを含め、三島由紀夫の作劇法を総合的にとらえることが必要であろう。このことは著者の今後の課題と言える。

とはいえ、著者は研究成果の一部をすでに全国規模の学会誌に発表し、同様に当該学界の大会等で口頭発表を行い、高い評価を得ている。本論文で著者が示した力量は今後の更なる発展を十分期待させるものであり、本論文がこの分野の研究に貢献するものであることは揺るがない。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。